

ミャンマースタディーツアーを終えて

田畑里紗

父がはじめてミャンマーを訪れ帰国した日、私たち家族に興奮気味に聞かせてくれたのを覚えている。「ミャンマーはいい。あんなに人々の目が綺麗でまっすぐな国はそうそうない。」と。

5年前、その父とともに姉がミャンマースタディーツアーに参加した。帰国後彼女は私たち家族に熱く語った。「自分のこれまでの価値観もこれからの生き方もなにかがこの旅で変わった。」と。

ミャンマーにいったい何があるっていうのだ。この5年間ずっと疑問だった。そしてこの疑問を自分の目で確かめて解決すべく、ついに今回私は父とともにこのミャンマースタディーツアーに参加することを決意した。

出発日を間違えて、「いまごろは飛行機に乗っているつもりだったんだけどなあ」と言いながら成田でお寿司を頬張るというボケっぷりをしょっぱなから発揮した田畑親子のミャンマースタディーツアーが始まる。

ヤンゴンに到着して飛行機を降りてすぐ、この国の匂いを感じた。国にはそれぞれ特有の匂いがあるというが（日本は醤油の匂いらしい）、私はこの東南アジア独特のちょっと埃っぽくて食べ物やお香の混ざったような匂いが、異国に来た感じがしてすごく好きだ。

ホテルでツアーの参加者と合流する。「あれ？学生わたし1人だけ？」ツアーの情報を何も知らなかったのだが、どうやら学生どころか若造は私一人だけのようだった。他はみんな大人。（うわあ、おとなしくしてよう……）と思っていた、ツアー二日目くらいまでは。ツアーが進むにつれ、学生の自分が大人に混じってこのツアーに参加している意味を考えるようになった。そして大人の方々の優しさに甘えて、好奇心のままに行動してみたり偉そうに意見をぶつけてみたりもした。なんだか自分が日本の学生代表としてここにいるような気がした。学生目線でミャンマーという国をしっかりとこの目に焼き付けて日本に帰らなきゃいけない。この漠然とした使命感のようなものはツアーの間ずっと抱き続けていた。

これまで東南アジアは数か国旅行してきたが、東南アジア最貧国の1つと言われるミャンマーの現状は凄まじかった。ヤンゴンは都会化が進み、車が道に溢れ、人々はスマホを使っていて、一見他の東南アジア諸国となんら変わらないように思えた。観光地やレストランでバスを降りると、たいいてい物売りの子供たちに囲まれる。これも他の国でも見られる光景ではある。だがこの国では物売りしている子供たちが異様に幼かったり、求める値段がそこまで高くなかったり、子供たちが売ろうとしている物が自分で画用紙に描いたイラストだったりすることに違和感を覚えた。学校には行っていないのだろうか。日本人だ

から値段をふっかけるという考えにはならないのだろうか。売る物すら持っていないから絵を描いたのだろうか。この子たちの親は何をしているのだろうか、働いているのか、遠くで子供がお金を貰うまで見張っているのか。でもこの子わりと綺麗な服着ているなあ、さっきの子は端切れを合わせたような服に裸足だったからこの子はまだマシなのかなあ。次々に近寄ってきて私を囲む子供たちを見つめながらこんなことを冷静に考えてしまう自分に嫌気がさした。子供たちにお金を渡してもなんの救いにもならないのだと自分に言い聞かせて、代わりに日本から持ってきたミルクキーを渡す。タイやマレーシアではこの手法は舌打ちされたり明らかに落ち込まれたり後ろに隠れていた親に睨まれたりすることがあった。でもミャンマーの子供たちはミルクキーに大喜び。私の渡した数が子供たちの数に合わないことが分ると、子供たちは私に他の子にも渡すよう頼んで来たり、ミルクキーをちぎってあげようとしたりしていた。後に述べるミャンマー人の心の在り方を、貧しい子供たちから感じた瞬間だった。

また、別の日の夜のことだ。レストランに向かう途中、道端の車のそばに人影を見つけた。なんだと思ってよく見ていると女性が座り込んでいた。腕の中にはぐったりとした赤ん坊。下を向いて動かないこの親子を見た瞬間、正直ゾクリとした。ツアーに参加していた女性が堪らずに駆け寄ってお金を渡しに行っていた。私は足がすくんで動けなかった。日本で、死に近いものから隔離されて生きている私にとって、あの光景はあまりにも恐ろしかった。何もできなかった。あれがミャンマーの貧困の現実なのに。私たちは視察団員としてこの貧困に苦しむ子供たちを、その親を、救うべくこの国に来たのに。ミャンマーに来て以来、毎日レストランで美味しいごはんを食べて綺麗なホテルに泊まってバスで移動していた私だが、ようやくこの国が抱える貧困に直に触れた気がした。あの赤ちゃんは今生きているのだろうか。あの女性は。思い返すだけで心がえぐられるように痛くなる。

そしてこのスタディツアーでの一番の大仕事。支援をする少数民族の村の優先順位を決めるため、村の代表者のプレゼンテーションを聞いた。それぞれの村の平均年収は日本円にしておよそ3～4万円。村人の仕事の7割が農作業。両親ともに毎日畑に出ないといけませんが小さな子供がいる。家に置いていけないから畑に連れていくが、子供たちが蛇に噛まれてしまったり、バイクに轢かれてしまったりする危険性がある。だから村には保育園が必要だが、ただでさえ低い年収のなか村人でお金を出し合って校舎を建てるのは難しい。それでも屋根のない簡易な建物を作ったり、小学校1年生の教室に保育園児も一緒に入れたりとできる工夫はしてきた。だが冬場は凍り付くように寒かったり、小学生の教育がままならなくなったりと問題は相次いでいる。村で出せるお金は出し合って、先生も連れてくるので、足りない分をどうか支援してほしい。これが村人たちの訴えだった。想像していたよりも遥かに厳しい現実を、淡々と、だが力強く話す村の代表者たちの目に、覚悟とプライドと、そして日本人への希望や期待を感じた。

すべての村のプレゼンテーションを聞いた後、私の中で1つ疑問が生まれた。3～5歳の子供の数の割合が0～2歳の子供の数の割合に比べて半数近くになっている村がある。他の村も共通して3～5歳の割合が極端に少ない。なぜ？ この疑問は周りの大人の方々も抱いたようで、みんな口々に言った。「出生率が上がったんじゃない？」「民主化が進んで少しずつ豊かにはなっているだろうから……。」確かにそれも考えられるけど何か引っかかる。でもこんな大人がいっぱいいる場でガキの私が発言していいものか……と悩んでいると、私の様子を見て隣に座っていた野口さんが質問してくださった。

「なぜ子供の割合がここまで違うのですか？」

村の代表者の答えはこうだった。「3歳まで生きられる子が少ないからです。」

愕然とした。村には病院がないので、子供が病気になってもすぐに治療することができない。日本では病院で簡単に治せるようなけがや病気でも、医療の乏しい彼らの村の赤ん坊がなれば命取りなのだ。これが貧困だ。これがこの国の現実だ。いくら民主化が進んだからって、いくらヤンゴンなどの都市部が都会化したって、貧困にあえぐ少数民族の暮らしがそう簡単に目に見えて良くなるわけがないのだ。今私の目の前に座っている村人たちが抱える現実がこれなのだ。

それに対し私たちツアー参加者は村の情報を何も知らなかった。基本情報をコンダクター役の方に聞いたが「わからないので村人に直接聞いてください」の一点張り。本気で言ってるの？そんなのでいいの？と思った。彼らは村の期待を一身に背負ってここに来ているのに、なんの情報も持たない私たちが順位をつけていいのか。あまりにも無責任ではないだろうか。こんな軽い気持ちで彼らの前に座っていることが恥ずかしくて仕方がなかった。ここに到着する前にバスの中ででもいいので村の基礎情報くらいは教えておいてほしかったと思う。

時間軸が前後するが、もう一つ私が日本人として悔しくなったことを書かせていただく。インレー湖でボートに乗りながら、首長族のいる店やロータス製品の店を見て回った後、1つの村に辿り着いた。ここで子供たちとゴミ拾いをするようになっていた。ツアコン役の人が言った。

「実は遅くなっちゃって子供たち1時間待たせてるんですよ。少し急ぎましょう。」

なぜそれを早く言ってロータス省かなかったのかと驚愕の事実戸惑いながら学校に向かい子供たちにミンガラバー。さあゴミ拾い、と思っただけお坊さんに挨拶に行くことに。ミャンマーではお坊さんが絶対的存在なので子供たちも分かってくれます、という言葉に促されお坊さんのもとへ挨拶に行き、さらに1時間子供たちを待たせる。やっと学校に戻ってきてさあゴミ拾いとなったときツアコンから一言

「時間ないので我々は15分ゴミ拾いして帰ります。」

この瞬間、私はこのツアーを友達に勧めたいという気持ちが失せてしまった。2時間待たされたとは思えない子供たちの笑顔を見て申し訳なくて泣きそうになりながら、私が思

ったのは1つ。「支援って自己満足と紙一重だ。」たった15分、ゴミ拾い活動と称して、ゴミを拾う子供たちや私たちの姿にカメラを向ければ、ご立派な『支援活動の写真』ができあがる。でもそれって本当の支援といえるのだろうか。子供たちや先生たちに日本人の私たちはどう映ったのだろうか。「私たち、こんなのでごめんね。」と言いたくて仕方なかった。

しかし子供たちが無邪気な笑顔で楽しそうにゴミ拾いをしてくれたこと、道端に座っていた地元のマイルドヤンキーたちが私たちの様子を見て道に捨ててあったゴミを持ってきてくれたこと、そして私たちがゴミ拾いを切り上げてボート乗り場に戻っている最中振り返れば子供たちが私たちに手を振りながらゴミ拾いしている姿が見えたことで、この活動にも少しは意味があったのだろうとなんとか自分の心を静めることができた。

このようにこのスタディツアーで私はあまりにも多くのことを経験しすぎた。自分のことが恥ずかしくなって、周りの大人に怒りが沸いて、それでもやっぱりただの学生である自分の無力さを感じて。自分のそれまでの甘い考え方なんてこてんぱんに潰された。毎日いろんなものを見て聞いて考えては混乱して、泣いて、大人たちに話を聞いてほしくて熱く語って、を繰り返していたらついに帰国前夜頭がショートしてぶっ倒れた。(ご迷惑をおかけしました……)

それくらい感情をぐちゃぐちゃにされたけど、そんなミャンマーを私は大好きになった。それはやっぱり人々の心の美しさに触れたからだと思う。『微笑みの国ミャンマー』とはよく言ったもので、この国ではお店の店員さんやホテルマンに限らず、子供たちや道ですれ違った人も、みんな目が合えばニコリと微笑んで「ミンガラバー（こんにちは）」と言ってくれる。そこから拙い英語とミャンマー語、そしてジェスチャーを交えて、楽しい会話が始まったりする。

言葉がわからないから、じっと目を見つめる。心の美しさ、優しさ、強さ。異国の地から来た私たちを温かく迎えてくれていること、それと同時に日本人の私たちに期待していること。好奇心、プライド、怯え、そして少しの欲。私に微笑みかけてくれた人々の目から色んな心のメッセージを受け取った。心を読むわけではないけれど、考えていることがなぜかすごく伝わってきた。うまく言えないけれど、これが父の言う「綺麗で真っすぐな目」なのかなと思った。みんながみんな良い人なわけがないし、そもそも良い人の基準なんてわからない。でも人に対して真っ直ぐに向き合う心と目を持つ人が多い国ではあると思う。その根底には、この国の人々の心に深く根付いた敬虔な仏教徒としての精神を感じた。「来世を幸せに生きるために現世で徳を積む」という教えのもと人々は生きている。「前世で悪事を働いたから今世は貧しい。だから今世で徳を積めば来世は幸せになれる。」この考え方を人々が本気で信仰しているから、貧しくても人を妬まないし、犯罪に手を染めない。等身大で生きている。これがミャンマー人の人柄が称えられる由縁ではないだろう

うか。

同時にいまミャンマーは貧しさから立ち上がろうとする国になりつつある。パオ族は「食べ物やお金よりも技術や教育をください。でないと私たちは口を開けて支援を待っているだけの民族になってしまう」といった。なんと誇り高く力強い言葉だろう。今世の貧しさを諦めるのではなく、自分の村と人々を救うべく立ち上がる人々がいる。支援をする私たち日本人にその認識と覚悟はあるのだろうか。

学生の自分の無力さをひたすらに感じた。ミャンマーへ来てまで綺麗なホテルや美味しい食事を求める大人たちに呆れ、あなたたちは何しに来たんだ、どこへお金を使ってるんだと言いたくて仕方がなかったが、結局お金があるのは大人。「100万円で学校1つ建てられる。」大人たちが本気を出せば簡単な金額でも、私には途方もない金額。じゃあ私こそ何しに来たんだ、ここでは日本の学生代表なのに、と毎晩ホテルで自分を責めては泣いた。

学生の自分にできることは何か、帰国してからもひたすら考えた。まだ答えははっきり出ていない。でも今の私にすぐできることは『情報発信』だと考えている。

みんなにミャンマーという国を知ってもらいたい。「ミャンマーってどんな国？何しに行くの？」と聞いてきた友人たちに、ミャンマーの現状を知ってもらいたい。1944年のインパール作戦で多くの日本兵がミャンマーの少数民族に命を助けられたって話、どれくらい日本人が知っているだろうか。私自身も知らなかった話だから、ちゃんと調べて、わかりやすく伝えて、ミャンマーという国の印象を変えたい、身近に感じてもらいたい。

はじめは Facebook や twitter で私の周りの人に向けて発信していこう。こないだ友達にミャンマーの少数民族の話をしたら涙流しながら聞いてくれた。夏にインターンでライターの仕事させてもらえたらミャンマーのこと書きたいな。今の私はこの段階。お金はないけど時間はある大学生の私にしかできない「情報発信」これから頑張っていきたい。

最後に、姉の言った通り私もこのツアーで価値観、人生観、なにかも変わった。人の綺麗な目の意味が分かった。ミャンマーという国が持つかけがえのない魅力を見つけた。こんなに考えさせられる旅、はじめてだった。できるならもっと多くの学生にこのツアーに参加してもらいたい。

このツアーに学生をもっと参加させたいとお考えなら、今回のツアーには足りなかったもの、余分だったもの、改善すべきものが沢山あったのではないのでしょうか。学生にとっては綺麗なホテルやレストランよりも、もっとローカルなミャンマーの人々の生活に寄り添ったツアーの方がずっとかけがえのない人生経験になると思います。

長すぎる文章なうえに散々文句を書きましたが、このツアーを企画・催行して下さった方々、生意気な私の意見を受け止めて論して下さったツアー参加者の皆さま、そしてミャンマーに連れてきてくれた父に心から感謝いたします。ありがとうございました。

